

# 白選五十首



## 雨宮雅子

あめみや・まさこ 1929年、東京都生まれ。1948年、昭和女子大在学中に川上小夜子に師事。「女人短歌」創刊に参加。「林間」「地中海」を経て、個人誌「鳩尾」を発行。現在、「雅歌の会」、「熱月の会」を主宰。「雅歌通信」発行。1988年『齋藤史論』で平林たい子賞を受賞。2002年短歌研究賞を受賞。

きららなす霜のあしたを明らけくこの生の緒や白きさざんくわ

灯にさらす胡桃の五つ掌に鳴りてあるいは鳥の五つの頭蓋

かがやきをまとひて歩む幼な兎のつばさみえねど若葉はつなつ

言葉みな立ちあがりくるこのゆふべ聖書一冊置ける卓あり

菜種田の黄を越えゆかむわが思ひ幼き者と訣れし日より

さくらばな見てきたる眼をうすずみの死より廻りしごとくみひらく

百合の蕊かすかにふるふこのあしたわれを悲しみたまふ神あり

足すすぐ夕ぐれさむしたまゆらをエマオの宿のパンを思へり

髪梳けるちからこもりてひたぶるに春の潮をひきしぼるなり

受難節すぎてみどりの木のしげみ羽あるものらこ糸に呼びあふ

しんしんと百日紅は咲き盛り夏のまなかにとほき夏あり

『鶴の夜明けぬ』

『悲神』

短歌をはじめたのは一九四八（昭和二十三）年。学校の短歌クラブで川上小夜子師に出会い、「女人短歌」の創刊にも参加したが、熱心な作者ではなかった。加えて昭和三十年代には、結婚、離婚、病気などで、十年近くも短歌を中断してしまった。

その後、復帰してからは本気になり、夫の竹田善四郎と個人誌「鳩尾」を創刊するなどして歌作にはげみだしたが、第一歌集は一九七六（昭和五十一）年の発行、おそい出発となった。同世代に追いつくのも大変だったが、若い頃の歌を切りすてて第一歌集を出したため、作品の完成度を自らに求めすぎ、窮屈な作歌もしてきたと思う。それでも「熱月」の

ひと枝がまづ苦しめばもろもろの枝もくるしむ寒の疾風に

きさらぎはひかりの林　みなゆきて光の創を負ひてかへれよ

近づきて額さびしけれ一本の白梅三分ほどの明るさ

捕虫網かざしはつなつ幼きがわが歳月のなかを走れり

咲き満てるさざん花の霜ほどけつつうすくれなるの楽流れいづ

天球の昼のめぐりにしろがねの芒したがふごとく靡けり

来歴のはては紺青　みづうみは謔けく夏の山頂にあり

蝌蚪生れし水のよろこび水の面に触れてかがやく風の前よるこび

熟れてゐる果実のかたへ静物となるべく秘法われに教へよ

列島を春の潮のめぐるあさ木木はちからを引き合ひて立つ

黒きネットに髪を覆へば夏の眼の大きくなりつ寡婦のごとしも

首あをく鳩歩みをり睡る間に越えたることのいくつかあらむ

ひと夜月下にさらし忘れし紺の服わがものにしてわがものならず

緑金の五月疲れいくたびも洗ふものありあはれわが顔

薄らなる夕べのひかり野の草はみな秋草となりて靡けり

竹と竹搏ちあふ音はいまさらに激しき生をわれに促す

春深むしづかなる夜目の黒き白魚一寸のみくだしたり

四照花咲く一山の油のごときちからに擲めとられつつ往く

垂直にほとばしる水受けとめて壺はその水を噴きあげてあつ

生き残る必死と死にてゆく必死そのはさまにも米を磨ぎるつ

### 「雅歌」

あたりから、少しずつ肩の力が抜けるようになった。目標としては、具体的なものを歌って象徴的な作品となること。

「昼顔の譜」は、夫の死去のため、最後半は挽歌集のようになった。一人で生きてゆく私の未来は、年をとっても、未知のままである。その未知の世界をどう生きるかが、私の今後の課題となった。

### 「秘法」

一方、私は、キリスト教をテーマにした歌が多いためか、よく敬虔なクリスチャンと言われる。たしかに若い日に洗礼を受けている。しかし、短歌空白の時期に教会とも訣別してしまい、後にこれも復帰したもの、教会生活に順応できず、いまもって多くの疑義を抱えている。私の歌は、そういう自分への問いかけ、問い直しであって、信仰が深いためではない。かつて「鴉尾」に連載していたモリヤック論を一本にまとめられないのも、このためなのだ。私はいまだに神を悲しませている者にすぎない。知識は信仰をもたらさないことを痛感しつつ、人生の終わり近くになって、何が見えてくるのか、これもまた未知の未来である。

「未知」は希望を宿すもの。「はじめに言ありき」はヨハネ伝の周知のことだが、「こ」とば」だけは信じて歌い続けてゆきたい。

### 「熱月」

### 「雲の午後」

基督を付せしピラトの長き夜につづく春夜のやみを踏みゆく

夏の夜のゴールドコンソメ過現未のあはきひかりのごときを掬ふ

地にひくきあけばのすみれに屈みたり度むことのなほわれにあり

たましひといふおぼるなるもの包み雨季のブラウス透けやすきかな

受難節淡く曇れり温室の「旅人の木」のかたはらに来つ

うちつけに照らし出されてさびしけれ夜の果実店のわれとくだもの

霧うごき木の花の匂ひ流れたり久遠の時間のなかのひととき

冷えすぎしメロンを切れば湖のごとくさびしき秋のはじまり

白きもの白く濯げばこれの世のあとさきといふに思ひ及びつ

くるしみは共有できず白粥のひかりを炊けどひかりを置けど

緑蔭に車椅子あり生きてここを出で得ざる者の車椅子あり

「旅人の木」

「昼顔の譜」

緑葉も空も見えざるきみを措きてわれはこの世の風に触れゆく

あめつちはけふ雨の領あめつちにただひとりなりし人失ひき

水色のやぐるまぎくをツタンカーメンの胸に置きにし妃のこころはや

けふひと日ひかりによりて耐へさせよ昼顔のうへ夏のきてをり

うつそみの人なるわれや夫の骨還さむとさがみの海に出で来つ

オリーブの壘あけるなどし夜を更かす生き残れるは敗者のごとき

帰りきて飲む水は身を貫けりじんじんとひとりの夜のはじまり

この年にわが見しものをなだむるか石路の花淡きひかりをまとふ